

第7回総会&現地報告会開催

大阪・活動報告会

《別紙》第7回総会資料



村のモスクを修復する父と、作業を見守るルビナ(2年)

9月25日の総会、そして10月2日の大阪・現地報告会が無事、終了いたしました。心に残っているのは、東京の総会に参加した会員の方が「会費のほとんどを学校のために使っていることは素晴らしい。その努力に感謝している」とご意見を述べられると、会場から賛同の温かい拍手が起きたことです。運営委員一同、胸を熱くいたしました。

年を経るごとに子どもたち、地域の人々、そして、会員の方たちとの交流は深まっていくのを実感しておりますが、会の活動も、残すところ、3年。状況の悪化が報道されていますが、学校のある地域に限って言えば、訪れるたびに、少しずつ村の生活が改善されているのを感じます。故サフダル校長も、「アフガニスタンは少しずつ良くなっている。あと5年もすれば、だいぶ復興も進むと思う。ただ、タリバーンの妨害がなければの話だが」と話していました。

それにつけても会の大きな支えであり、活動の伴走者だったサフダル校長の逝去が残念でなりません。毎年、山の学校に、新しい1年生が入ってくるわけですから、あちらに旅立つ人がいるのは当たり前かもしれませんが、38歳は早すぎます。山の学校に通っているサフダルの3人の子どもたち(6年生のファトナ、5年生のシャボナ、バーセツト)がせめて、中学を卒業できるまで、教育費支援を続けようと、基金を開設いたしました。皆様の温かいお気持ちが届くのを待っております。

雪化粧の山々を背に、通学する子どもたちの姿を思いつつ。

長谷川洋子

第7回総会&現地報告会開催報告

9月25日(土)、92名の皆様にご参加いただき、武蔵野芸能劇場にて第7回総会&現地報告会を開催しました。今年は駐日アフガニスタン大使館よりパシール・モハバット氏をお招きし、アフガニスタンと日本の意外な関係についてわかりやすく解説していただきました。

【総会】

副代表の比留川より本年の国内活動、現地支援活動についての説明を行い、その後会計の森より収支報告をさせていただきました(詳細は別紙総会報告資料をご参照ください)。またQ&Aでは以下のような質問があり、今後の会としての活動方針についても議論がなされました。

Q&A

Q・会発足当時は、10年経てばアフガニスタンの政治情勢も安定し独立を果たしているのではないかと考えから期日を区切った形で会を立ち上げましたが、現状のアフガニスタン情勢をみるに、この会



の趣旨として、あと4年後に突然支援を打ち切るというわけにはいかないのではないのでしょうか。10年という区切りがついた後の会としての活動の方向性について、写真のようなものがあれば教えてください。

A・悩ましいところではあります。現実的に4年後にアフガニスタンがよくなっているかは私にもわかりません。生前のサフダルは「あと5年あれば復興するだろう。ただしタリバンとかヒズビイスラムなどが何もしなければの話だ」と言っていました。現実的に当会は10年という約束で会員の皆様から資金を集めているわけなので、簡単に「いつかはあと10年延長します」とはいえないし、私自身が引き続き山の学校を毎年のように訪問し続けるということも体力的にも難しいのかなと考えています。ただ10年経った際すつと手をひくのではなく、最後の年に小学校に在籍していた子どもたちが学校にいる間だけでも、私が直接現地でチェックできなくても、なんらかの形で支援を継続していきたいと思っています。サフダルも「それがいい」と言っています。そのような形で支援を継続していく中で、少しずつアフ

ガニスタンに平和が戻ってきてくれればいいと考えています。

【現地報告会】

本年度のスライドトークでは、学校内や登下校時の様子だけでなく、パンシールに住む「人」「生活」そのものにフォーカスした写真も多く紹介され、長倉代表のトークにも自然と「この子はこの道具で何をしているのか」「この子は学校から帰った後どんな仕事をしているのか」といったエピソードが数多くありました。また、新しく建設中のモスク、カプールの経済的に成功した人々のセカンドハウスなどが紹介される一方、子どもたちが昔ながらに羊を追いかけたたり家事を手伝ったりする写真も映し出され、パンシールの新旧入り混じった現在の素顔がそのまま映し出された報告会となりました。

Q&A

Q・一部の集落で家が減ってしまったというお話がありました。過疎化が進んで子どもたちが少なくなってしまうという事は、将来的に減っていく方向になってしまわないのでしょうか。

A・現時点ですぐに子どもがいなくなるという事はないですが、将来的には減っていく方向になってしまわないかと思っております。豊かさを求めて都市に出ていく家も多いですが、ただすべての家族が都市で成功を収められるわけでもなく、パンシールに戻ってくる家族も多いです。

Q

・写真を見ていて女の子が少なくなっている気がしましたが。

A・女の子も数としては半分くらいいるし、実際に学校にも来ています。ただし、家に女の子が3〜4人以上いる場合、家事を手伝うため交代で学校を休むといったことはあるみたいです。

Q・日本の学校において見られるような文化的な学校行事(文化祭、学芸会など)はありますか。

A・私の見た限り、アフガニスタンではそのようなことをやる習慣はないように思います。

「わが心のアフガニスタン」

続いて駐日アフガニスタン大使館次席代表(現臨時大使)のパシール・モハバット氏に「わが心のアフガニスタン」というテーマで40分ほど講演を行っていただきました。アフガニスタンの位置、資源、気候、また複雑な歴史、文化についても流暢な日本語で解説していただきました。アフガニスタンという国の名前がかつて(アラブ地方の中でいちばん東に位置するため)「日出ずる国」だったこと、近代化が始まった時期が日本と同じく1800年代末であったこと、また今上天皇皇后両陛下がかつてアフガニスタンをご訪問されていたことなどが紹介され、アフガニスタンと日本との浅からぬ関係に皆さん感心して聞き入っておられました。また過去の歴史だけでなく、文化や風習、コミュニケーションを大切にしているとのお話も印象的でした。



時折ユーモアを交えて講演するパシール氏

アフガニスタンの現状に関して

は、国づくりというのは破壊するのは一瞬にして可能だがつくり上げるのには長い年月がかかるガラス細工のようなものだ」と説明された上で、けれども最近は復興のペースも目覚ましいものになってきていると講演されました。マスコミは事件の話しか報じないが、実際のアフガニスタンは学校も含めて少しずつよくなってきており、例えばタリバン時代には一部の男子しか受けられなかった学校も、今では700万以上の男女学生が教育を受けている、また言論の自由、商売の自由、集会の自由といったことが保障されるようになったことも大きな進展だと述べられています。これらの発展については日本を含む諸外国からの支援が欠かせなかったとし、山の学校を含む日本からの援助について感謝の意を述べられた上で、今後もアフガニスタン復興へ向けて着実に努力していく旨お話をされ、パシール氏の講演は終了しました。

交流会

今年、安井さんが女性自立支援のために現地で作成・販売しているアフガングッズの展示・販売と、山の学校の子どもたちが自分たちで撮影した写真の展示を行いました。皆さんお気に入りの作品を見つけては熱心にご覧になっていました。(子どもたちの撮影した写真については次号の誌面の一部紹介する予定です。また交流会にお菓子を持ってきていただいた皆様、本当にどうもありがとうございました。)



刺繍が美しいアフガングッズの数々

総会・現地報告会アンケートより

【総会】

*よくやってくださっていて、すばらしいと思います。長倉さんは温かい方で、現地報告会はどうしても情緒的なものになりますので、総会でももう少し森さんらが現地の事務的な報告(先生の数、学年別生徒数、新入生の数、カリキュラムなど)をなさった方がよいように思います。

【現地報告会スライドトーク】

*悲しい別れもあったけれど、子どもたちの成長を樂しみに長倉さんの活動報告の底に流れる思いが伝わってきました。

*現地の生活の様子など、写真を通じて色々知ることができて良かったです。また、学校に行きながらも

一生懸命に働いている子どもたちがすごいと思いました。(一般参加)

【支援の会活動】

*10周年に向けて岩を加工したモノキュメントなり記念文集なり、差し当たり毎年卒業文集を残すようにしてはどうでしょうか。

*現地の人たちに教育の場を提供し、それも現地の人たちが主体となって活動しているところに意義があると思う。(一般参加)

【バシールモハバット氏講演】

*誇り高い歴史、誇り高い諸民族の説明、現在の復興の話等、直接アフガンの要職にある人から聞くことができ当然ですが新鮮でとても良かったです。

大阪現地報告会を終えて

改めまして、本年度の総会・報告会が無事、終了しまして、安心しました。今回の総会においては、会の運営に

関して、会員さんから賛同と、会場からの温かい拍手をいただける場に立ち会うことができました。

長倉代表が、サフダル校長との対話で、ガラスにたとえ、こんな話をしておられました。「ガラスを壊すのは、小石、ひとつでできる。が、つくり上げるのには、手間と時間がかかる。国つくりは人間つくり。アフガニスタンの大きな『武器』は、国民みんなが平和を望んで、政治に参加していること。自分のアイデンティティを守るために『侵略者』と闘う。」

運営委員を中心に、私たちが支援しているのは、まさに『人間づくり』だと言えます。

一人ひとりが、大きな夢と希望を持っている山の学校の子どもたちが、今のアフガニスタンの礎を築いたマスードや、サフダル校長の想いを継いでおとなになり、それを次の子どもたちに伝えてくれることを願っています。

以前、マスードとの対話の中で、こんな話を聞いたことがあります。

長倉「生きるとは、どういうことか？」
マスード「思想の為に闘うことだ」
長倉「思想の為に闘うとは、どういうことか？」
マスード「譲れないものを守る闘いだ」

今、アフガニスタンで暮らしている人たちは、日本で暮らしている私たちも、その想いを持って、自分のかかわっている人たちと繋がって、助け合っていて、頼りあっているけれど、自分たちが望む居心地の良い街に、社会になっっていくのではないのでしょうか。

ヤノママの教えでしたが、「地球の根っこ」というのがありました。人と人は、根っここのところ繋がっている。

受け入れる人がいて、繋がっていきける。それは、お互いの違いを認めた上で、手をつないでいけることだと思います。

この会は、会員一人ひとりが繋がっていきける会であると思います。年に一度の総会・報告会に集まるだけでなく、普段から、アフガニスタンのことを話題にできるよう、近くにいる会員さんと繋がっていければ、その輪をみなさんと広げていければと考えています。

(大阪運営委員 雨堤・辻内・林)

広がれ！パネル展のわ

「アフガニスタン山の学校支援の会」活動展



2007年度訪問時の撮影映像も大型スクリーンで終日上映



JICA地球ひろば(東京・広尾)イベントホールにて9月28日から10月10日まで、JICA地球ひろば企画の国別展示「アフガニスタン」の関連イベントとして写真パネルや子どもたちの絵、アフガニスタンの民族衣装や帽子等を展示し、期間中700人近い方に見ていただくことができました。

ミニパネル展

事務局の近くにあるYギャラリー(オーナーが会員)にて10月13日から19日までパネル展を開催しました。小さなギャラリーですが多くの方が熱心に見てくださり新刊『マジヤミン』やポストカードを販売し、カンパもいただきました。



Yギャラリーでパネル展を開催

山の学校ポストカードクリスマスパーティー

これまで山の学校のポストカード第1~6集を各集500円で販売してきましたが、このたび、どれでも2セット500円(送料別)でご提供いたします。「3集と5集を1セットずつ」「6集を4セット」など組合せは自由です。実質半額となるこの機会にぜひご購入いただき、クリスマスカードや年賀状にご活用ください。

*お求めの際は事務局までお問い合わせください。2セットよりご注文を承り、併せて送料のご案内をいたします。☆☆☆
*会報のバックナンバー3、6、11、16号にポストカードのご案内が写真入りで載っていますので、ご参照ください。

サフダル遺児育英基金

サフダル校長が亡くなったことは前回の会報の折り込みでもお知らせいたしました。その後、安井さんが帰国した折、死亡原因が結核だったことがわかりました。サフダルの肺を写したレントゲン写真を見ましたが肺全体が真っ白でした。

一昨年から調子が悪く、カプールの病院に通っていました。「もらった薬を飲んでいながら大丈夫だろう」と話していました。夜通し咳をしており、「結核かもしれないから、きちんと見てもらおう」とカプールの大きな病院に連れて行ったこともありです。そこでも結核とわからなかったようです。その段階できちんと発見、処置してもらっていたら、こんなことにはならなかったはずなのにと悔しい思いでいっぱいです。



緑あふれるマスードの家の中庭で (2007年)



息子のサタールと (2007年)

ブルーの医療の遅れがその背景にあったと思わざるを得ません。

しかし、どんなことも言っても、もうサフダルは帰ってきません。今、何より心配なのは、残された家族の生活。なかでも、まだ通学中の子どもたちのことです。彼らがこのまま、山で暮らすのか、あるいはカプールなどで暮らすのか、これから行われるであろう親族会議の場で決まると思います。

どちらにせよ、会としては、その3人が何とか中学を卒業できるまで、一家に月60ドル程度の生活・教育支援をしたいと思っております、その



4年生の生徒たちと (2010年)

でいました。私たちが訪問した4月の前後に2度、入院して手術まで受けていたのに、どうして、対処出来なかったのか。血液検査もパキスタンにまで送らなければわからないという力

ための基金を立ち上げることにしました。また、サフダルがパキスタンまで搬送され、治療を受けた医療費がかなりの額にのぼったため、それも基金によって補えればと思っております。



体調が悪いが、子に勉強を教える (2010年)

子どもたちが家の事情で学業を中断するとしたら、墓の中のサフダルも悔やんでも悔やみきれない思いをします。「子どもたちが未来に羽ばたけるような教育環境をつくる」というのが会の趣旨です。それに鑑み、皆様の温かいお志をいただけるとうれしいです。昨今の経済事情の悪化のなかで、皆様にご寄付のお願いをするのは大変、心苦しいのですが、何とぞ、よろしくお願いいたします。

基金の趣旨にご賛同いただける場合、同封させていただきます専用の郵便振替用紙にご寄付いただける金額を明記の上、今までと同じようにお振り込みいただければ幸いです。

代表 長倉洋海

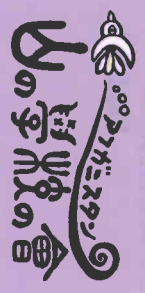
事務局から

● 第7回総会で配布した資料を同封いたしました。内容をご覧になり、ご意見やご感想などがございましたらぜひお寄せください。
● 2010年度分割会費未納の方に郵便振替用紙を同封させていただきましたので、指定期日までに納入をお願いいたします。なお、会費の残額は封筒の宛名ラベルの下段に表示されている数字ですのでお確かめください。
● JVC(日本国際ボランティアセンター)国際協力センター「アジアの瞳」のチラシを同封いたしました。長倉代表の写真ではありませんがご購入いただけます。ご協力をよろしくお願いいたします。
● 長倉代表が山の学校を訪れる中で出会った一人の少女、マジヤミンの写真絵本が創刊されました。
「アフガニスタンの少女 マジヤミン」
新日本出版社 1680円



ポランテの小さな仲間たち

	
ソハイル君 (一年生)	アフドルカテール君 (一年生)
	
バンニラちゃん (一年生)	セシャート君 (一年生)



〒187-0032 東京都小平市小川町1-1071-15 比留川 気付
FAX&留守番電話: 042-345-7805 E-mail: info.yamanogakko@yahoo.co.jp
http://www.h-nagakura.net/yamanogakko
郵便振替口座: 00160-1-667404
編集●天野みか 岩動 柴 大守 裕 佐々木 麻紀 水間 真紀
題字●イナスト●近藤 理恵 子サイン●浅井 充志 印刷●(有)アトタツク

アフガニスタンの学校支援の会は、写真家・長倉洋海が取材活動を通して出会った、パンシール渓谷ポランテ村の子どもたちの教育支援を目的として設立された非営利の団体です。2004年2月に設立、以後2014年3月までの約10年間にわたり活動を続けていきます。